

県西地域の木工品というと、箱根の寄木細工が最も有名でしょうか。木地の色の違いを使って精巧な寄木（象嵌）で模様や絵をつくり、それをかんなどで薄く削ったものを木工品に貼り付けたものです。でも小田原はそれ以外の木工品でも有名な街です。小田原で木工業が盛んになったのは、もともと箱根や西丹沢の山中で木を切って器などの木製品をつくる木地挽業を営んでいた人たちが、江戸時代に市街に出てきて生産を始めたからだと言われています。

私は小田原市栄町の生まれで、新玉小学校の出身です。私が子どもの頃住んでいた家の周りには何軒か製造直売の家具屋さんがありました。その一軒である「かしわぎ」家具屋さんは、元は南足柄の矢倉沢の出身で、小田原に出てきて家具の製造販売を始め、そのお弟子さんたちが周りに家具屋を開店したそうです。私は新栄通りにあったかしわぎ家具屋さんや茶半家具屋さんの工場で、ガーガーと材木を切ったり削ったりする音を四六時中聞きながら、店の前の歩道で友達と遊んでいました。

当時は小田原の中町、寿町、東町、扇町のあたりに、木工品を製造する町工場が住宅に混じってたくさんありました。友人のお父さんには、漆を表面に塗った食器や日用品の木工品（小田原漆器）をつくっている職人さんがいて、今もそのお店で買ったペン皿を校長室で使っています。箱根細工や小田原漆器のお店は現在もありますが、家具屋さんは大変少なくなりました。かしわぎ家具店も茶半家具店も今は閉めてしまいました。

もう一つ小田原の木工品で忘れてはいけないものがあります。それは「竹ものさし」（木製の定規）です。鴨宮駅の南側に「酒匂」という地区があります。ここで江戸時代の終わり頃に竹ものさしの生産が始まり、生産のピークだった昭和33年（60年以上前になります）には、生産本数が700万本を超え、全国の竹ものさしの約80%を生産していました。こんなに竹ものさしの生産が盛んだったのは、周辺で良質な竹が取れたからだと言われています。（神奈川県立博物館の資料による）

木工には正確に長さを図るものさしは必須の道具ですし、職人さんに愛用されたと想像されます。一本一本に細かい作業で目盛りを掘り、そこに墨を染み込ませて見やすくした竹ものさし。むかし母親が裁縫をするときにはいつも使っていましたが、いまではすっかり見なくなりました。ピーク直後の昭和30年代に、なぜか周辺の竹林で花が咲いて竹が一斉に枯れるようになり、またものさしもプラスチック製のものが主流になる中で、生産が衰退していきました。現在は竹ものさしをつくる工場は、小田原にはありませんが、度器（長さや角度を測る道具）を作る会社は残っています。

